

## 向田邦子との出会い

——『父の詫び状』を通して

宮崎県立宮崎大宮高等学校 二年

川崎 真由子

我が家の居間に飾られた一枚の写真。この女性はいったい誰なのだろう。幼い頃からの疑問をそのままにして、私は中学生になった。その人が「向田邦子」という作家だと知ったのは、母の言葉からだ。あなたには創作はうまいけど、生活文がへたっぴね。」と私を揶揄する母に、特別に書きたいようなことが何もない、と反論すると、母は「生活文が書けないのは心の目がまだぴかっと開いてないからよ。そろそろ向田さんに教えてもらおう時がきたみたいね。」と言った。

私は、本を読むことは幼い頃から好きだった。両親は、七歳上の兄には丁寧な「読み聞かせ」をしつらしたが、私の時には、とんと絵本や童話の「読み聞かせ」は行われなかった。そのせいか、私は、児童文学を飛び越えて、他の友達よりも早く、大人の読書に足を踏み入れていた。小学生の頃から、文学賞受賞作品や推理小説などを熱心に読んだ。言葉遣いや表現も、友達

より大人びていたかもしれない。

そんな私に、母は、まったく聞いたこともない「向田邦子」という作家を読めと言う。こうして私の「向田邦子学校」への入学が決まった。大人にならなければ理解できない作品もあるし、放送作家の作品を読み味わうには力不足の私ではあるが、高校二年になった今も、少しずつ向田作品を読み進めている。なかでも、私のバイブルとなったのは『父の詫び状』である。バイブルと名付ける理由は四つある。

第一に、文章を書く以前に、自分の前にある一つ一つのものと心を感ずることの大切さを教えてくれたこと。そして、それは難しいことではなく、どんな日常なことにも「こだわりの」をもつことで、書く素材はどんどん膨らんでいくこと。

第二に、文章を書くということは、言葉の数を増やしていくことではなく、言葉の数を引き算していくことだと教えてくれたこと。向田邦子の文章には、選び抜かれ、磨かれた言葉の数々が、落ち着いた光を放ち、そして息づいている。

第三に、「人間観察」の在り方を教えてくれることである。「家族」という最も主観が入りやすいコミュニティを描いてあることで、そのことはさらに私を納得させる。こんな父親と一緒に暮らすのはちょっと面倒くさいだろうなあと思わせながら、読後には、こんなお父さん、かっこいいなあと思わせる。祖母の年代である向田邦子の生きた時代を知らない私にも、そうい

う気持ちを抱かせる向田邦子の魔法。一人一人の家族を、まるで自分は感情をもたない人間であるかのように、淡々とした客観的な目で描き切ることで、読み手の私に、家族一人一人に対するイメージを豊かに想像させる。そして、その想像が正しいものであるように導く魔法。そして、何よりも、「書かない」

ことで、「書かれていること」以上のものを読み手に与えることのできる魔法の魅力は、私を夢中にさせる。「書かれていないもの」とは、例えば、空気や音や光やにおいや人の表情や視線やしぐさや人生背景などである。そして、これまでに読んだ作品の中には、善い人ばかりは描かれていない。しかし、どの登場人物にも一貫して感じるのは、向田邦子の、人間に対する温かい目線である。性格に癖のある人間、ずるい人間、過ちを犯した人間、どれも世間からは疎まれる人種であろうが、向田邦子は、そんな人間こそおもしろくて、作品の材料にもしてみたくなるのよ、と言っているように思う。そして、そんな人間たちはあなたの中にもいるのよ、とも言っているような気がする。

第四に、作品のネーミング。どれも、その絶妙さにならなくなってしまふ。『あ・うん』『思い出トラップ』『霊長類ヒト科動物図鑑』『夜中の薔薇』『男どき女どき』など。向田邦子の魅力で忘れてならないのは、これだ！ という選球眼だと思う。それは、彼女の生き方や考え方にも表れていて、向田邦子のような女性

になれたらいいなあこがれる。私にとって、向田邦子の文章や考え方は、潔くかっこいい。一言で言えば、「凛々しさ」である。誰よりも女らしい細やかな目線や気配りにあふれ、それでいて、この上なく凛々しい。

さて、私の母は、向田邦子の文章から何を学んでほしいと思ったのか。作品だけでなく、彼女の人生そのものを尊敬している母は、私に向田邦子の世界に足を踏み入れたことが嬉しそうだ。そして、母が言った、「心の目をぴかっと開く」ことが言葉と向き合うことの第一歩だということを、少しずつ分かってきた私がいる。ところで、今年に向田邦子没後三十年だそうだ。元気ならば、今、八十二歳。きっと、素敵で凛々しいおばあちゃんであったことだろう。できることなら、邦子さんと一度会ってみたかと思う私であるが、母の思惑どおりに「向田邦子」にはまったくいく自分に、「悔しい幸せ」を感じている。

体験書籍

『父の詫び状』向田邦子著